

随想「甘え」が日本を滅ぼす どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第5回 日本が輝く海洋民族だった時代

1. 現在の日本は病的な内弁慶

日本はなぜ今不況でなければいけないのだろうか。日本を取り巻くアジアは、中国を筆頭に世界で最も急成長している市場だ。その中で、飛びぬけて高度な技術力を有する日本は、二度目の高度経済成長期を迎えてもいはずだ。

ところが、現実が違う。日本の中小企業は、頑固なまでに内弁慶で、海外に売り込みをしない。外国から見れば、中国は名の無い中小企業も怒涛の如く売り込みに来るが、日本は大企業しか顔が見えない。その大企業も、商社を通じて慣れ親しんだところしか売り込めない。

トヨタはアメリカにばかり売り込んで世界一になったが、過度なプレゼンスで猛烈なパッシングをうけている。アメリカよりも大きくなった中国の自動車市場では、ヨーロッパのフォルクスワーゲンがトップ企業でトヨタは全くの後発組というのは実に奇妙だ。

アフリカでもトップの10カ国は成長著しい。日本にとって未開発のマーケットは、世界中にいくらでもある。日本企業が内弁慶さを克服できれば不況などいっぺんで吹っ飛ばはずだ。それができないのは今の日本人が閉鎖的で意識が常に内向きだからだ。

らだ。

ところが、実は日本には今とは全く違った外に大きく輝いた時代があった。

2. 応仁の乱後の大発展

応仁の乱（1467-1477）が終わってからの鎖国令（1633-1639）までの約160年間、日本人は、今から考えられないほど外に開いた海洋民族だった。

応仁の乱はそれまでの支配体制を崩壊させ日本は戦国時代に入るが、同時に、日本人は農業中心の生活から本格的に商業経済と取り組むこととなり、町衆文化、都市文化が大いに発展することとなった。その勢いは国内にとどまることなく、爆発するようにガンガンと外に出て行った。今の日本人とは比べられないほど視野は外に向いていたのだ。

さががけは倭寇だ。13世紀から倭寇が東シナ海で暴れまわっていた。倭寇が歴史に登場するということは、同時に一般の商人も活躍していたことを意味する。

明は国是として朝貢貿易を除き外国貿易を禁止していたが、足利幕府は勘合貿易を通じ交易をしていた。11年にわたる応仁の乱後は、幕府の権力が地に落ちる中で戦国大名の細川氏と大

内氏が勘合貿易の利を争い、細川氏が堺商人、大内氏が博多商人を使って競い合っていた。両者は、1543年寧波で激突するような事態も起きている。

細川、大内が勘合貿易を競っていたころ、西国大名は民間貿易を大きく成長させていた。松浦氏、大友氏、島津氏などの大名はことに熱心であった。同時に、堺と博多の商人も積極的に対外貿易に活躍していた。

当時は、明との間の貿易だけでなく、南方（今の東南アジア）との貿易も急拡大しており、ルソンやカンボジアへの進出が特にめだつていた。

注目すべきは、単に日本と外国との取引だけでなく、南方と中国間という中継貿易に日本人が大活躍するようになったことだ。まさに、日本人は海洋民族だったのだ。

忘れてならないのは琉球だ。14世紀以降東アジア全域の中継貿易に積極的にかかわっていた。当時の日本人は、東シナ海、南シナ海をまたにかけて商売をしていたのだ。

中国人も16世紀になると明の国禁を破り、その多くが日本や朝鮮との貿易に携わっていたが、その一団にはほとんどと言つていいほど日本人がかかわっていたという。今に至る華僑はこのころが起源だが、その勢いは日

本人のほうがはるかに強かったようだ。当時の日本人は海洋民族の素質を十分そなえていたのだ。

3. ヨーロッパとの出会い

日本人がアジアで海洋民族の如く活躍していたころ、ポルトガルのバスコダガマが1498年喜望峰を回るインド航路を発見した。その後ポルトガルは南インドのカリカットやゴアを拠点にインド洋の海上権を取得し、1516年には早くも中国との中継貿易に進出してきた。

1543年、ポルトガル人が種子島に漂着し日本に鉄砲を伝えたが、これが日本にとりポルトガルとの最初の出会いであり、ヨーロッパとの本格的な出会いであった。

その後のポルトガルは活発だった。中国と日本、日本と南方間の中継貿易を行い、16世紀後半、ポルトガルは自国との貿易より中継貿易のほうが10倍も利益を上げていたという。東シナ海、南シナ海は地中海の如く活発な交易の場となっていたのだ。交易品は、中国からは生糸、絹織物、日本からは銀が中心であった。

当時の日本は世界最大の銀の産出国であり、最盛期は世界の銀の3分の1を産出したという。当時の日本は交易の材料を豊か

に持っていた。これをもって日本人はポルトガルと堂々と渡り合っただけで中継貿易に活躍していたのだ。

スペインはポルトガルに遅れてアジアに進出し、1574年にフィリピンを植民地化した。しかし、それに先立ち1570年にスペイン人がマニラに入ると、そこにはすでに日本人町があり日本人が住んでいたという。ルソン島には日本人の砦もあり、両者に戦いもあつたようだ。

当時、マニラにおける砦のような日本人の拠点はアジアのあちこちにあり、ベトナムのホイアイやダナン、タイのアユタヤなどは、かなりの規模を誇っていたようだ。

江戸幕府の開始（1603）後は、朱印船貿易により日本人の交易はさらに大きく発展していった。天測儀も備えていたといわれる朱印船による渡航者は七万人、うち一万人が、南方の日本人町に居住していた。この朱印船貿易は正規の交易であるが、非公式な渡航はもつと多かつたはずだ。

当時の日本人の勢いを象徴的に語るのが山田長政だ。彼は、1612年にタイにわたつてそこで日本人町の指導者になるが、当時のアユタヤ王朝の国王の片腕となつて活躍したことは有名だ。



山田長政像

1582年、西国の諸大名により天正遣欧使節が送り出された。13から14歳の少年が使節だった。彼らは、ローマ法王に謁見し立派にその役目を果たしたが、当時の日本人は今の日本人と同じ日本人とは思えないような広い世界観を持っていたようだ。遠くヨーロッパのあなたに使節を送り出そうというエネルギーはすごいし、少年がその役割を果たせるという時代もすこかった。

西国大名だけでない。東北の伊達正宗は1613年にメキシコに支倉常長他180人の使節を派遣し、通商を企画している。未知の世界に果敢に挑戦しようとする、このようなエネルギーが当時の日本にあつたのだ。

秀吉の朝鮮出兵（1592-1598）は暴挙のように言われるが、私はそうは思わない。日本が外に発展していこうとする当時の歴史の流れとしては、あつてもおかしくない歴史現象だ。

象だ。秀吉だけの狂気だったら、諸大名をあのようには動員できなかったであろう。秀吉は明まで攻め入ろうとする野望もあつたという。日本が外に向かおうとしたエネルギーは巨大だったのだ。

4. 海洋民族の封印

しかし、この日本人の海洋民族という特質は封印された。それが幕藩体制であり、鎖国だ。ところがこの封印は明治維新によつて一旦解き放たれ、西欧との遅れを取り戻そうとする「坂の上の雲」の世界が展開する。

ところが、それが、再度封印され、敗戦を経て現代に至り、バブル後の停滞と衰退の時代を招来している。それはなぜだろうか。この点の説明は次回にしよう。



金子博人
(かねこ ひろひと)

金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程（商法）修了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会（IFITA）会員。大東文化大学法科大学院。日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員（東京工業品取引所）。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。